

倫敦塔

夏目漱石

青空文庫

二年の留学中ただ一度倫敦塔を見物した事がある。その後再び行こうと思つた日もあ
 るがやめにした。人から誘われた事もあるが断つた。一度で得た記憶を二返目に打壊わす
 のは惜しい、三たび目に拭い去るのはもつとも残念だ。「塔」の見物は一度に限ると思う。
 行つたのは着後間もないうちの事である。その頃は方角もよく分らんし、地理などは固
 より知らん。まるで御殿場の兎が急に日本橋の真中へ抛り出されたような心持ちであつ
 た。表へ出れば人の波にさらわれるかと思ひ、家に帰れば汽車が自分の部屋に衝突しはせ
 ぬかと疑ひ、朝夕安き心はなかつた。この響き、この群集の中に二年住んでいたら吾が
 神経の纖維もついに鋼の中の麤海苔のごとくべとべとになるだろうとマクス・ノルダウ
 の退化論を今さらのごとく大真理と思ふ折さえあつた。

しかも余は他の日本人のごとく紹介状を持つて世話になりに行く宛もなく、また在留の
 旧知とては無論ない身の上であるから、恐々ながら一枚の地図を案内として毎日見物の
 ためもしくは用達のため出あるかねばならなかつた。無論汽車へは乗らない、馬車へも
 乗れない、滅多な交通機関を利用しようとすると、どこへ連れて行かれるか分らない。こ
 の広い倫敦を蜘蛛手十字に往来する汽車も馬車も電気鉄道も鋼条鉄道も余には何らの便

宜をも与える事が出来なかつた。余はやむを得ないから四ツ角へ出るたびに地図を披いて
通行人に押し返されながら足の向く方角を定める。地図で知れぬ時は人に聞く、人に聞いて
知れぬ時は巡査を探す、巡査でゆかぬ時はまたほかの人に尋ねる、何人でも合点の行く
人に出逢うまでは捕えては聞き呼び掛けては聞く。かくしてようやくわが指定の地に至る
のである。

「塔」を見物したのはあたかもこの方法に依らねば外出の出来ぬ時代の事と思う。来るに
来所なく去るに去所を知らずと云うと禪語めくが、余はどの路を通つて「塔」に着し
たかまたいかなる町を横ぎつて吾家に歸つたかいまだに判然しない。どう考えても思い出
せぬ。ただ「塔」を見物しただけはたしかである。「塔」その物の光景は今でもありあり
と眼に浮べる事が出来る。前はと問われると困る、後はと尋ねられても返答し得ぬ。ただ
前を忘れ後を失したる中間が会釈もなく明るい。あたかも闇を裂く稲妻の肩に落つると
見えて消えたる心地がする。倫敦塔は宿世の夢の焼点のようだ。

倫敦塔の歴史は英国の歴史を煎じ詰めたものである。過去と云う怪しき物を蔽える戸帳
が自ずと裂けて龕中の幽光を二十世紀の上に反射するものは倫敦塔である。すべてを葬
る時の流れが逆しまに戻つて古代の一片が現代に漂い来れりとも見るべきは倫敦塔である。

人の血、人の肉、人の罪が結晶して馬、車、汽車の中に取り残されたるは倫敦塔である。

この倫敦塔を塔橋の上からテムス河を隔てて眼の前に望んだとき、余は今の人はた古えの人かと思うまで我を忘れて余念もなく眺め入った。冬の初めとはいいながら物静かな日である。空は灰汁桶を掻き交ぜたような色をして低く塔の上に垂れ懸っている。壁土を溶し込んだように見ゆるテムスの流れは波も立てず音もせず無理矢理に動いているかと思わるる。帆懸舟が一隻塔の下を行く。風なき河に帆をあやつるのだから不規則な三角形の白き翼がいつまでも同じ所に停っているようである。伝馬の大きいのが二艘上つて来る。ただ一人の船頭が艫に立つて艫を漕ぐ、これもほとんど動かない。塔橋の欄干のあたりには白き影がちらちらする、大方鷗であろう。見渡したところすべての物が静かである。物憂げに見える、眠っている、皆過去の感じである。そうしてその中に冷然と二十世紀を軽蔑するように立っているのが倫敦塔である。汽車も走れ、電車も走れ、いやしくも歴史の有らん限りは我のみはかくてあるべしと云わぬばかりに立っている。その偉大なるには今さらのように驚かれた。この建築を俗に塔と称えているが塔と云うは単に名前のみで実は幾多の櫓から成り立つ大きな地域である。並び聳ゆる櫓には丸きもの角張りたるものいろいろの形状はあるが、いずれも陰気な灰色をして前世紀の紀念を永劫

に伝えんと誓えるごとく見える。九段の遊就館を石で造つて二三十並べてそうしてそれを虫眼鏡で覗いたらあるいはこの「塔」に似たものは出来上りはしまいかと考えた。余はまだ眺めている。セピヤ色の水分をもつて飽和したる空気の中にぼんやり立つて眺めている。二十世紀の倫敦がわが心の裏から次第に消え去ると同時に眼前の塔影が幻のごとく過去の歴史を吾が脳裏に描き出して来る。朝起きて啜る渋茶に立つ煙りの寢足らぬ夢の尾を曳くように感ぜらるる。しばらくすると向う岸から長い手を出して余を引張るかと思はれて来た。今まで佇立して身動きもしなかつた余は急に川を渡つて塔に行きたくなつた。長い手はなおなお強く余を引く。余はたちまち歩を移して塔橋を渡り懸けた。長い手はぐいぐい牽く。塔橋を渡つてからは一目散に塔門まで馳せ着けた。見る間に三万坪に余る過去の一大磁石は現世に浮游するこの小鉄屑を吸収しおわたつた。門を入れて振り返つたとき、

憂の国に行かんとするものはこの門を潜れ。

永劫の呵責に遭わんとするものはこの門をくぐれ。

迷惑の人と伍せんとするものはこの門をくぐれ。

正義は高き主を動かし、神威は、最上智は、最初愛は、われを作る。

我が前に物なしたただ無窮あり我は無窮に忍ぶものなり。

この門を過ぎんとするものはいっさいの望を捨てよ。

という句がどこぞで刻んではないかと思つた。余はこの時すでに常態を失つてゐる。

空濠からほりにかけてある石橋を渡つて行くと向うに一つの塔がある。これは丸形の石造

で石油タンクの状をなしてあたかも巨人の門柱のごとく左右に屹立きつりつしている。その中間

を連ねている建物の下を潜つて向へ抜ける。中塔とはこの事である。少し行くと左手に鐘

塔ゆとうが峙そばだつ。真鉄まかねの盾たて、黒鉄くろがねの甲かぶとが野を蔽おほう秋の陽炎かげろうのごとく見えて敵遠くより寄す

ると知れば塔上の鐘を鳴らす。星黒き夜、壁へきじょう上じやうを歩む哨兵しょうへいの隙すきを見て、逃れ出ず

る囚人の、逆さかしまに落す松明たいまつの影より闇に消ゆるときも塔上の鐘を鳴らす。心傲おごれる市

民の、君の政非まつりごとなりとて蟻ありのごとく塔下に押し寄せて犇ひしめき騒ぐときもまた塔上の鐘を鳴

らす。塔上の鐘は事あれば必ず鳴らす。ある時は無二に鳴らし、ある時は無三に鳴らす。

祖そきた来る時は祖を殺しても鳴らし、仏ぶつきた来る時は仏を殺しても鳴らした。霜しもの朝あした、雪ゆうべの夕、雨

の日、風の夜を何べんとなく鳴らした鐘は今いずこへ行つたものやら、余が頭こうべをあげて蕙つた

に古ふるりたる櫓やぐらを見上げたときは寂然せきぜんとしてすでに百年の響を収めている。

また少し行くと右手に逆賊門ぎやくぞくもんがある。門の上には聖タマス塔セントが聳そびえている。逆賊門

とは名前からがすでに恐ろしい。古来から塔中に生きながら葬られたる幾千の罪人は皆舟からこの門まで護送されたのである。彼らが舟を捨ててひとたびこの門を通過するやいなや娑婆しやばの太陽は再び彼らを照らさなかつた。テムムスは彼らにとつての三途さんずの川でこの門は冥府よみに通ずる入口であつた。彼らは涙の浪なみに揺られてこの洞窟どうくつのごとく薄暗きアーチの下まで漕こぎつけられる。口を開あけて鰭いを吸いう鯨くじらの待ち構まえている所まで来るやいなやキーと軋きる音と共に厚あつがし樫あの扉は彼らと浮世の光りとを長とこしえに隔へだてる。彼らはかくしてついに宿命の鬼の餌食えしきとなる。明日あす食あわれるか明後日食あさつてわれるかあるいはまた十年の後に食あわれるか鬼よりほかに知るものはない。この門に横よこ付つけにつく舟の中に坐ましている罪人の途中の心はどんなであつたらう。櫂かいがしわる時、雫しずくが舟縁ふなべりに滴したたる時、漕こぐ人の手の動く時ごとに吾が命を刻まるるように思ったであらう。白き髻ひげを胸まで垂れて寛ゆるやかに黒の法ほ衣うえを纏まとえる人がよろめきながら舟から上る。これは大僧正クランマーである。青き頭巾ずきんを眉深まぶかに被かぶり空色の絹の下に鎖くさり帷かたびら子こをつけた立派な男はワイアットであらう。これは会え釈しやくもなく舷ふなべりから飛び上ある。はなやかな鳥の毛を帽に挿さして黄金こがね作りの太刀たちの柄えに左の手を懸かけ、銀の留め金にて飾れる靴の爪先を、軽かろげに石段の上に移すのはローリーか。余は暗くきアーチの下を覗のぞいて、向う側には石段を洗あう波の光の見えはせぬかと首を延のばした。

水はない。逆賊門とテムス河とは堤防工事の竣功以来全く縁がなくなつた。幾多の罪人を呑み、幾多の護送船を吐き出した逆賊門は昔しの名残りにその裾を洗う笹波の音を聞く便りを失つた。ただ向う側に存する血塔の壁上に大なる鉄環が下がっているのみだ。昔しは舟の纜をこの環に繋いだという。

左りへ折れて血塔の門に入る。今は昔し薔薇の乱に目に余る多くの人を幽閉したのはこの塔である。草のごとく人を薙ぎ、鶏のごとく人を潰し、乾鮭のごとく屍を積んだのはこの塔である。血塔と名をつけたのも無理はない。アーチの下に交番のような箱があつて、その側らに甲形の帽子をつけた兵隊が銃を突いて立っている。すこぶる真面目な顔をしているが、早く当番を済まして、例の酒舗で一杯傾けて、一件にからかつて遊びたいという人相である。塔の壁は不規則な石を畳み上げて厚く造つてあるから表面は決して滑ではない。所々に蔦がからんでいる。高い所に窓が見える。建物の大きいせいか下から見るとはなはだ小さい。鉄の格子がはまつているようだ。番兵が石像のごとく突立ちながら腹の中で情婦とふざけている傍らに、余は眉を攢め手をかぎしてこの高窓を見上げて佇む。格子を洩れて古代の色硝子に微かなる日影がさし込んできらきらと反射する。やがて煙のごとき幕が開いて空想の舞台がありありと見える。窓の内側は厚き戸帳が垂

れて昼もほの暗い。窓に対する壁は漆喰も塗らぬ丸裸の石で隣りの室とは世界滅却の日に至るまで動かぬ仕切りが設けられている。ただその真中の六畳ばかりの場所は冴えぬ色のタペストリで蔽われている。地は納戸色、模様は薄き黄で、裸体の女神の像と、像の周圍に一面に染め抜いた唐草である。石壁の横には、大きな寝台が横わる。厚樫の心も透れと深く刻みつけたる葡萄と、葡萄の蔓と葡萄の葉が手足の触る場所だけ光りを射返す。この寝台の端に二人の小児が見えて来た。一人は十三四、一人は十歳くらいと思われる。幼なき方は床に腰をかけて、寝台の柱に半ば身を倚たせ、力なき両足をぶらりと下げている。右の脇を、傾けたる顔と共に前に出して年嵩なる人の肩に懸ける。年上なるは幼なき人の膝の上に金にて飾れる大きな書物を開けて、そのあけてある頁の上に右の手を置く。象牙を揉んで柔かにしたるごとく美しい手である。二人とも烏の翼を欺くほどの黒き上衣を着ているが色が極めて白いで一段と目立つ。髪の色、眼の色、さては眉根鼻付から衣装の末に至るまで兩人共ほとんど同じように見えるのは兄弟だからであろう。

兄が優しく清らかな声で膝の上なる書物を読む。

「我が眼の前に、わが死ぬべき折の様を想い見る人こそ幸あれ。日毎夜毎に死なんと願え。

やがては神の前に行くなる吾の何を恐るる……」

弟は世に憐れなる声にて「アーメン」と云う。折から遠くより吹く木枯しの高き塔を撼がして一度びは壁も落つるばかりにゴーと鳴る。弟はひたと身を寄せて兄の肩に顔をすりつける。雪のごとく白い蒲団の一部がほかど膨れ返る。兄はまた読み初める。

「朝ならば夜の前に死ぬと思え。夜ならば翌日ありと頼むな。覚悟をこそ尊べ。見苦しき死に様ぞ恥の極みなる……」

弟また「アーメン」と云う。その声は顫えている。兄は静かに書をふせて、かの小さき窓の方へ歩みよりて外の面を見ようとす。窓が高く背が足りぬ。床几を持って来てその上につまだつ。百里をつつむ黒霧の奥にぼんやりと冬の日が写る。屠れる犬の生血にて染め抜いたようである。兄は「今日もまたこうして暮れるのか」と弟を顧みる。弟はただ「寒い」と答える。「命さえ助けてくるなら伯父様に王の位を進ぜるものを」と兄が独り言のようにつぶやく。弟は「母様に逢いたい」とのみ云う。この時向うに掛っているタペストリに織り出してある女神の裸体像が風もないのに二三度ふわりふわりと動く。

忽然舞台が廻る。見ると塔門の前に一人の女が黒い喪服を着て悄然として立っている。面影は青白く窶れてはいるが、どこことなく品格のよい気高い婦人である。やがて

錠じょうのきしる音がしてぎいと扉あが開くと内から一人の男が出て来て恭うやうやしく婦人の前に礼をす
る。

「逢う事を許されてか」と女が問う。

「否いな」と氣の毒そうに男が答える。「逢わせまつらんと思えど、公けの掟おきてなればぜひなし
と諦あきらめたまえ。私の情売わたくしなるは安き間の事まにてあれど」と急に口を緘つぐみてあたりを見渡す。
濠ほりの内からかいつぶりがひよいと浮き上る。

女は頸うなじに懸けたる金の鎖きんくさりを解いて男に与えて「ただ束つかの間まを垣間かいま見んと願ねがひなり。女にょに
人の頼たのみ引き受けぬ君はつれなし」と云う。

男は鎖くさりを指の先に巻きつけて思案の体ていである。かいつぶりはふいと沈む。ややありて
いう「牢守ろうもりは牢の掟おきてを破りがたし。御子みこらは変る事なく、すこやかに月日を過ぎさせたも
う。心安く覺おぼして帰かへりたまえ」と金の鎖くさりを押戻す。女は身動きもせぬ。鎖くさりばかりは敷石
の上に落ちて鏘そうぜん然と鳴る。

「いかにしても逢う事は叶かなわずや」と女が尋たずねる。

「御氣ごきの毒なれど」と牢守ろうもりが云い放つ。

「黒き塔の影、堅き塔の壁、寒き塔の人」と云いながら女はさめざめと泣く。

舞台がまた変る。

丈たけの高い黒装束くろしやうぞくの影が一つ中庭の隅にあらわれる。苔寒こけき石壁いしの中からスーと抜け出たように思われた。夜と霧との境に立つて朦朧もうろうとあたりを見廻す。しばらくすると同じ黒装束の影がまた一つ陰の底から湧わいて出る。櫓やぐらの角に高くかかる星影を仰いで「日は暮れた」と背せの高いのが云う。「昼の世界に顔は出せぬ」と一人が答える。「人殺しも多くしたが今日ほど寢覚ねぞめの悪い事はまたとあるまい」と高き影が低い方を向く。「タペストリの裏うらで二人の話しを立ち聞きした時は、いつその事止やめて帰ろうかと思うた」と低いのが正直に云う。「絞しめる時、花のような唇くちびるがぴりぴりと顫ふるうた」「透すき通るような額ひたいに紫色の筋が出た」「あの唸うなった声はまだ耳に付いている」。黒い影が再び黒い夜の中に吸い込まれる時櫓やぐらの上で時計の音があんと鳴る。

空想は時計の音と共に破れる。石像のごとく立っていた番兵は銃を肩にしてコトリコトリと敷石の上を歩いている。あるきながら一件いっけんと手を組んで散歩する時を夢みている。血塔の下を抜けて向むへ出ると奇麗な広場がある。その真中まんなかが少し高い。その高い所に白塔がある。白塔は塔中のもつとも古きもので昔むかしの天主である。豎たて二十間、横十八間、高さ十五間、壁の厚さ一丈五尺、四方に角すみやぐら楼むかが聳そびえて所々にはローマン時代の銃じゆうが

眼ん さえ見える。千三百九十九年国民が三十三カ条の非を挙げてリチャード二世に讓位じょういをせまったのはこの塔中である。僧侶、貴族、武士、法士の前に立って彼が天下に向つて讓位を宣告したのはこの塔中である。その時讓りを受けたるヘンリーは起つて十字を額と胸に画して云う「父と子と聖靈の名によつて、我れヘンリーはこの大英國の王冠と御代とを、わが正しき血、恵みある神、親愛なる友の援を藉りて襲ぎ受く」と。さて先王の運命は何なんびと人も知る者がなかつた。その死骸がポント・フラクト城より移されてセントポール寺に着した時、二万の群集は彼の屍しかばねめくを繞つてその骨立せる面影おもかげに驚かされた。あるいは云う、八人の刺客せつかくがリチャードを取り巻いた時彼は一人の手より斧おのを奪いて一人を斬り二人を倒した。されどもエクストンが背後より下せる一撃のために恨を呑んで死なれたと。ある者は天を仰いで云う「あらずあらず。リチャードは断食だんじきをして自らと、命の根をたたれたのじや」と。いづれにしてもありがたくない。帝王の歴史は悲惨の歴史である。

階下の一室は昔しオルター・ロリーが幽囚ゆうゆうの際万国史ばんこくしの草を記した所だと云い伝えられている。彼がエリザ式の半ズボンに絹の靴下を膝頭ひざがしらで結んだ右足を左りの上へ乗せて鷲がペンの先を紙の上へ突いたまま首を少し傾けて考えているところを想像して見た。

しかしその部屋は見る事が出来なかつた。

南側から入つて螺^{らせん}旋^{じよう}状^の階段^を上^るとここ^に有名^な武器^陳列^場がある。時々手を入れ
るものと見えて皆^びか^びか^光つて^いる。日本^にお^つたとき歴史^や小説^で御^目に^かか^るだけ
でいつ^こう要^領を^得な^かつた^もの^が一^々明^瞭に^なる^のは^はな^はだ^嬉しい。しかし^嬉しいの
は一時^の事^で今^{では}ま^るで^忘れ^てし^まつた^から^やは^り同^じ事^だ。ただ^なお^記憶^に残^つて^い
る^のが^甲冑^{である}。その中^{でも}実^に立^派だ^{と思}つた^のは^たしか^へん^り六^世の^着用^し
た^もの^と覚^えて^いる。全体^が鋼^鉄製^で所^々に象^嵌がある。も^つとも^驚く^のは^その^偉大^な
事^{である}。か^かる^甲冑^を着^けた^もの^は少^なく^とも^身の^丈七^尺く^らい^の大^男で^なく^ては^なら
ぬ。余^が感^服して^この^甲冑^を眺^めて^いると^コト^リ^コト^リと^足音^がして^余の^傍へ^歩いて^来
る^のが^{ある}。振^り向^いて^見ると^ビフ・^イター^{である}。ビフ・^イター^と云^うと^始終^し
牛^{でも}食^つて^いる^人の^よう^に思^われる^がそ^んな^もの^では^ない。彼^は倫^敦塔^の番^人である。
シルク^{ハット} 絹^帽を^潰した^よう^な帽^子を^被つて^美術^学校^の生^徒の^よう^な服^を纏^うて^いる。太^い袖^の
先^を括^くつて^腰の^ところ^を帯^でし^めて^いる。服^{にも}模^様が^ある。模^様は^蝦夷^人の^着る^半纏^の
について^いる^よう^なす^こぶ^る単^純の^直線^を並^べて^角形^に組^み合^わした^もの^に過^ぎぬ。彼
は^時として^槍を^さえ^携える^事が^ある。穂^の短^かい^柄の^先に^毛の^下が^つた^三国^志に^でも^出

そんな槍をもつ。そのビーフ・イーターの一人が余の後ろに止まった。彼はあまり背の高くない、肥り肉の白髯の多いビーフ・イーターであった。「あなたは日本人ではありませんか」と微笑しながら尋ねる。余は現今の英国人と話をしていて気がしない。彼が三四百年の昔からちよつと顔を出したかまたは余が急に三四百年の古えを覗いたような感じがある。余は黙して軽くうなづく。こちらへ来たままと云うから尾いて行く。彼は指をもつて日本製の古き具足を指して、見たかと云わぬばかりの眼つきをする。余はまただまつてうなづく。これは蒙古よりチャーレス二世に献上になつたものだどビーフ・イーターが説明をしてくれる。余は三たびうなづく。

白塔を出てポーシャン塔に行く。途中に分捕の大砲が並べてある。その前の所が少しばかり鉄柵に囲い込んで、鎖の一部に札が下がっている。見ると仕置場の跡とある。二年も三年も長いのは十年も日の通わぬ地下の暗室に押し込められたものが、ある日突然地上に引き出さるるかと思うと地下よりもなお恐しきこの場所へただ据えらるるためであった。久しぶりに青天を見て、やれ嬉しやと思ふまもなく、目がくらんで物の色さえ定かには眸中に写らぬ先に、白き斧の刃がひらりと三尺の空を切る。流れる血は生きているうちからすでに冷めたかつたであろう。鳥が一疋下りている。翼をすくめて黒い嘴をと

がらせて人を見る。百年碧^{へきけつ}血^{うらみ}の恨^こが凝^けつて化^{ちよう}鳥^{よう}の姿^{なり}となつて長くこの不吉な地を守るような心地がする。吹く風に楡^{にれ}の木がざわざわと動く。見ると枝の上にも鳥がいる。しばらくするとまた一羽飛んでくる。どこから来たか分らぬ。傍^{そば}に七つばかりの男の子を連れ、た若い女が立つて鳥を眺^{なが}めている。希臘^{ギリシヤ}風の鼻^{ぶな}と、珠^{たま}を溶^といたようにうるわしい目と、真白^{まびやく}な頸^{くび}筋^{すじ}を形^{かたち}づくる曲線^{まげ}のうねりとが少からず余の心を動かした。小供は女を見上げて「鴉^{からす}が、鴉^{からす}が」と珍^{めづ}らしそうに云う。それから「鴉^{からす}が寒^さむそうだから、麵^{めん}麩^ぷをやりたい」とねだる。女は静かに「あの鴉^{からす}は何にもたべたがつていやしません」と云う。小供は「なぜ」と聞く。女は長い睫^{まつげ}の奥^{おく}に漾^{ただよ}うているような眼^{まなこ}で鴉^{からす}を見詰^まめながら「あの鴉^{からす}は五羽います」といつたぎり小供の間^まには答^{こた}えない。何か独^{ひと}りで考^{かんが}えているかと思^{おも}わるくらい澄^{すま}している。余はこの女とこの鴉^{からす}の間^まに何か不思議^{ふしぎ}の因^{いん}縁^{ねん}でもありはせぬかと疑^{うたが}つた。彼は鴉^{からす}の気分^{きぶん}をわが事^{こと}のごとくに云^いい、三羽^{さん}しか見^みえぬ鴉^{からす}を五羽^ごいると断^{ことわ}言^いする。あやしき女^{おんな}を見捨^すてて余は独^{ひと}りボーシヤン塔^{とう}に入る。

倫敦塔の歴史はボーシヤン塔の歴史であつて、ボーシヤン塔の歴史は悲酸^{ひさん}の歴史である。十四世紀の後半にエドワード三世の建^{こん}立^{りゆう}にかかるとこの三層塔の一階室^いに入るものはその入るの瞬間^{しゅんげん}において、百代の遺恨^{いごん}を結晶^{けつじやう}したる無数の紀念^{きねん}を周囲の壁上^{かべ}に認^{しん}むるのである。

う。すべての怨、すべての憤、すべての憂と悲みとはこの怨、この憤、この憂と悲の極端より生ずる慰藉と共に九十一種の題辭となつて今になお観る者の心を寒からしめている。冷やかなる鉄筆に無情の壁を彫つてわが不運と定業とを天地の間に刻みつけたる人は、過去という底なし穴に葬られて、空しき文字のみいつまでも娑婆の光りを見る。彼らは強いて自らを愚弄するにあらざやと怪しまれる。世に反語というがある。白というて黒を意味し、小と唱えて大を思わしむ。すべての反語のうち自ら知らずして後世に残す反語ほど猛烈なるはまたとあるまい。墓碣と云い、紀念碑と云い、賞牌と云い、綬賞と云いこれらが存在する限りは、空しき物質に、ありし世を偲ばしむるの具となるに過ぎない。われは去る、われを伝うるものは残ると思うは、去るわれを傷ましむる媒介物の残る意にて、われその者の残る意にあらざるを忘れたる人の言葉と思う。未来の世まで反語を伝えて泡沫の身を嘲る人のなす事と思う。余は死ぬ時に辞世も作るまい。死んだ後は墓碑も建ててもらふまい。肉は焼き骨は粉にして西風の強く吹く日大空に向つて撒き散らしてもらおうなどといらざる取越苦勞をする。

題辭の書体は固より一様でない。あるものは閑に任せて叮嚀な楷書を用い、あるものは心急ぎてか口惜し紛れかがりがりと壁を搔いて擲り書きに彫りつけてある。またある

ものは自家の紋章を刻み込んでその中に古雅な文字をとどめ、あるいは盾の形を描いてその内部に読み難き句を残している。書体の異なるように言語もまた決して一様でない。英語はもちろんの事、以太利語も羅甸語もある。左り側に「我が望は基督にあり」と刻されたのはパスリユという坊様の句だ。このパスリユは千五百三十七年に首を斬られた。その傍に JOHAN DECKER と云う署名がある。デッカーとは何者だか分らない。階段を上つて行くと戸の入口に H.C. というのがある。これも頭文字だけで誰やら見当がつかぬ。それから少し離れて大変綿密なのがある。まず右の端に十字架を描いて心臓を飾りつけ、その脇に骸骨と紋章を彫り込んでいる。少し行くと盾の中に下のような句をかき入れたのが目につく。「運命は空しく我をして心なき風に訴えしむ。時も摧けよ。わが星は悲かれ、われにつれなかれ」。次には「すべての人を尊べ。衆生をいつくしめ。神を恐れよ。王を敬え」とある。

こんなものを書く人の心の中はどのようなであつたらうと想像して見る。およそ世の中に何が苦しいと云つて所在のないほどの苦しみはない。意識の内容に変化のないほどの苦しみはない。使える身体は目に見えぬ縄で縛られて動きのとれぬほどの苦しみはない。生きるというは活動しているという事であるに、生きながらこの活動を抑えらるるの生とい

う意味を奪われたると同じ事で、その奪われたを自覚するだけが死よりも一層の苦痛である。この壁の周囲をかくまでに塗抹した人々は皆この死よりも辛い苦痛を嘗めたのである。忍ばるる限り堪えらるる限りはこの苦痛と戦つた末、いても起つてもたまらなくなつた時、始めて釘の折や鋭どき爪を利用して無事の内に仕事を求め、太平の裏に不平を洩らし、平地の上に波瀾を画いたものである。彼らが題せる一字一画は、号泣、涕淚、その他すべて自然の許す限りの排悶的手段を尽したる後なお飽く事を知らざる本能の要求に余儀なくせられたる結果であろう。

また想像して見る。生れて来た以上は、生きねばならぬ。あえて死を怖るるとは云わず、ただ生きねばならぬ。生きねばならぬと云うは耶蘇孔子以前の道で、また耶蘇孔子以後の道である。何の理窟も入らぬ、ただ生きたいから生きねばならぬのである。すべての人は生きねばならぬ。この獄に繋がれたる人もまたこの大道に従つて生きねばならなかつた。同時に彼らは死ぬべき運命を眼前に控えておつた。いかにせば生き延びらるるだろうかとは時々刻々彼らの胸裏に起る疑問であつた。ひとたびこの室に入るものは必ず死ぬ。生きて天日を再び見たものは千人に一人しかない。彼らは遅かれ早かれ死なねばならぬ。されど古今に亘る大真理は彼らに誨えて生きよと云う、飽くまでも生きよと云う。彼らはや

むをえず彼らの爪を磨いだ。尖がれる爪の先をもつて堅き壁の上に一と書いた。一をかける後も真理は古えのごとく生きよと囁く、飽くまでも生きよと囁く。彼らは剥がれたる爪の癒ゆるを待つて再び二とかいた。斧の刃に肉飛び骨摧ける明日を予期した彼らは冷やかなる壁の上にただ一となり二となり線となり字となつて生きんと願つた。壁の上に残る横縦の疵は生を欲する執着の魂魄である。余が想像の糸をここまでたぐつて来た時、室内の冷氣が一度に背の毛穴から身の内に吹き込むような感じがして覚えすぞつとした。そう思つて見ると何だか壁が湿っぽい。指先で撫でて見るとぬらりと露にすべる。指先を見ると真赤だ。壁の隅からぼたりぼたりと露の珠が垂れる。床の上を見るとその滴りの痕が鮮やかな紅いの紋を不規則に連ねる。十六世紀の血がにじみ出したと思う。壁の奥の方から唸り声さえ聞える。唸り声がだんだんと近くなるとそれが夜を洩るる凄い歌と変化する。ここは地面の下に通ずる穴倉でその内には人が二人いる。鬼の国から吹き上げる風が石の壁の破れ目を通つて小やかなカンテラを煽るからださえ暗い室の天井も四隅も煤色の油煙で渦巻いて動いているように見える。幽かに聞えた歌の音は窖中にいる一人の声に相違ない。歌の主は腕を高くまくつて、大きな斧を轆轤の砥石にかけて一生懸命に磨いでいる。その傍には一挺の斧が抛げ出してあるが、風の具合でその白い刃がびかり

びかりと光る事がある。他の一人は腕組をしたまま立って砥の転るのを見ている。髯の中
から顔が出ていてその半面をカンテラが照らす。照らされた部分が泥だらけの人参のよ
うな色に見える。「こう毎日のように舟から送つて来ては、首斬り役も繁昌だのう」
と髯がいう。「そうさ、斧を磨ぐだけでも骨が折れるわ」と歌の主が答える。これは背の
低い眼の凹んだ煤色の男である。「昨日は美しいのをやったなあ」と髯が惜しそうにい
う。「いや顔は美しいが頸の骨は馬鹿に堅い女だった。御蔭でこの通り刃が一分ばかりか
けた」とやけに轆轤を転ばす、シユシユシユと鳴る間から火花がピチピチと出る。磨ぎ手
は声を張り揚げて歌い出す。

切れぬはずだよ女の頸は恋の恨みで刃が折れる。

シユシユシユと鳴る音のほかには聴えるものもない。カンテラの光りが風に煽られて磨ぎ
手の右の頬を射る。煤の上に朱を流したようだ。「あすは誰の番かな」とややありて髯が
質問する。「あすは例の婆様の番さ」と平気に答える。

生える白髪を浮気が染める、骨を斬られりや血が染める。

と高調子に歌う。シユシユシユと轆轤が回る、ピチピチと火花が出る。「アハハハも
う善かろう」と斧を振り翳して灯影に刃を見る。「婆様ぎりか、ほかに誰もいないか」

と髯がまた問をかける。「それから例のがやられる」「気の毒な、もうやるか、可愛相にのう」といえば、「気の毒じやが仕方がないわ」と真黒な天井を見て嘯く。

たちまち審も首斬りもカンテラも一度に消えて余はポーシヤン塔の真中に茫然と佇んでいゝ。ふと気がついて見ると傍に先刻鴉に麵麴をやりたいと云った男の子が立っている。例の怪しい女もものごとくついている。男の子が壁を見て「あそこに犬がかいてある」と驚いたように云う。女は例のごとく過去の権化と云うべきほどの屹とした口調で「犬ではありません。左りが熊、右が獅子でこれはダッドレー家の紋章です」と答える。

実のところ余も犬か豚だと思つていたのであるから、今この女の説明を聞いてますます不思議な女だと思う。そう云えば今ダッドレーと云つたときその言葉の内に何となく力が籠つて、あたかも己れの家名でも名乗つたごとくに感ぜらるる。余は息を凝らして兩人を注視する。女はなお説明をつづける。「この紋章を刻んだ人はジョン・ダッドレーです」あたかもジョンは自分の兄弟のごとき語調である。「ジョンには四人の兄弟があつて、その兄弟が、熊と獅子の周囲に刻みつけられてある草花でちゃんと分ります」見るとなるほど四通りの花だか葉だかが油絵の枠のように熊と獅子を取り巻いて彫つてある。「ここにあらのは Acorns だけだ Ambrose の事です。うちらにあるのが Rose で Robert を代表する

のです。下の方に忍冬にんどうが描いてありましょう。忍冬はHoneysuckleだからHenryに当るのです。左りの上に塊かたまりっているのがGeraniumでこれはG……」と云ったぎり黙っている。見ると珊瑚さんごのような唇くちびるが電気でも懸かけたかと思われるまでにぶるぶると顫ふるえている。蝮まむしが鼠ねずみに向つたときの舌の先のごとくだ。しばらくすると女はこの紋章の下に書きつけてある題辞だいじを朗ほがらかに誦じゆした。

Yow that the beasts do wel behold and se,

May deme with ease wherefore here made they be

With borders wherein ……………

4 brothers' names who list to serche the grovnd.

女はこの句を生れてから今日きょうまで毎日日課にっかとして暗誦あんしよしたように一種の口調をもつて誦じゆした。実を云うと壁にある字ははなはだ見悪みにくい。余のごときものは首ひねを捻ひねつても一字も読めそうにない。余はますますこの女を怪しく思う。

気味が悪くなつたから通り過ぎて先へ抜ける。銃眼じゆうがんのある角を出ると滅茶苦茶めちやくちやに書き綴つづられた、模様だか文字だか分らない中に、正しき画かくで、小くちいさ「ジエーン」と書いてある。余は覚えすその前に立留たどまつた。英国の歴史を読んだものでジエーン・グレーの名を

知らぬ者はあるまい。またその薄命と無残の最後に同情の涙を濺がぬ者はあるまい。ジェーンは義父と所天の野心のために十八年の春秋を罪なくして惜気もなく刑場に売った。蹂み躪られたる薔薇の蕊より消え難き香の遠く立ちて、今に至るまで史を繙く者をゆかしがらせる。希臘語を解しプレーターを讀んで一代の碩学アスカムをして舌を捲かしめたる逸事は、この詩趣ある人物を想見するの好材料として何人の脳裏にも保存せらるるであろう。余はジェーンの名の前に立留つたぎり動かない。動かないと云うよりむしろ動けない。空想の幕はすでにあいている。

始は両方の眼が霞んで物が見えなくなる。やがて暗い中の一点にパツと火が点ぜられる。その火が次第次第に大きくなって内に人が動いているような心持ちがする。次にそれがだんだん明るくなってちやうど双眼鏡の度を合せるように判然と眼に映じて来る。次にその景色がだんだん大きくなって遠方から近づいて来る。気がついて見ると真中に若い女が坐っている、右の端には男が立っているようだ。両方共どこかで見たと考えた。うち、瞬たくまにズツと近づいて余から五六間先ではたと停る。男は前に穴倉の裏で歌をうたっていた、眼の凹んだ煤色をした、背の低い奴だ。磨ぎすました斧を左手に突いて腰に八寸ほどの短刀をぶら下げて身構えて立っている。余は覚えすギョツとする。女は白

き手巾ハンケチで目隠しをして両の手で首を載せる台を探すような風情ふぜいに見える。首を載せる台は日本の薪割台まきわりだいぐらいの大きさに前まへに鉄の環かんが着いている。台の前部ぜんぶに藁わらが散らしてあるのは流れる血を防ぐ要慎ようじんと見えた。背後の壁にもたれて二三人の女が泣き崩くずれている、侍女でもあろうか。白い毛裏を折り返した法衣ほうえを裾長く引く坊さんが、うつ向いて女の手を台の方角へ導いてやる。女は雪のごとく白い服を着けて、肩にあまる金色こんじきの髪を時々雲のように揺らす。ふとその顔を見ると驚いた。眼こそ見えね、眉まゆの形、細き面おもて、なよやかなる頸くびの辺りあたりに至いたるまで、先刻さつき見た女そのままである。思わず馳かけ寄ろうとしたが足が縮ちぢんで一步も前へ出る事が出来ぬ。女はようやく首斬り台を探り当てて両の手をかける。唇がむずむずと動く。最前さいぜん男の子にダッドレーの紋章を説明した時と寸分すんぶん違わぬ。やがて首を少し傾けて「わが夫ギルドフオード・ダッドレーはすでに神の国に行つてか」と聞く。肩を揺り越した一握ひとにぎりの髪が軽くうねりを打つ。坊さんは「知り申さぬ」と答えて「まだ真まとの道に入りたもう心はなきか」と問う。女屹きつとして「まこととは吾と吾夫おつとの信ずる道をこそ言え。御身達の道は迷いの道、誤りの道よ」と返す。坊さんは何にも言わずにいる。女はやや落ちついた調子で「吾夫が先なら追いつこう、後あとならば誘さそうて行こう。正しき神の国に、正しき道を踏んで行こう」と云い終つて落つるがごとく首を台の上に投

げかける。眼の凹くぼんだ、煤すす色の、背の低い首斬り役が重たげ気に斧をエイト取り直す。余の洋袴ズボンの膝に二三ほとば点の血が逆しると思つたら、すべての光景が忽こっぜん然と消え失うせた。

あたりを見廻ぼうぜんわすと男の子を連れた女はどこへ行つたか影さえ見えない。狐に化ばかされたような顔をして茫然ぼうぜんと塔を出る。帰り道にまた鐘しゆとう塔の下を通つたら高い窓からガイフォークスが稲妻いなずまのような顔をちよつと出した。「今一時間早かつたら……」。この三本のマツチが役に立たなかつたのは実に残念である」と云う声さえ聞えた。自分ながら少々気が変だと思つてそこそこに塔を出る。塔橋を渡つて後うしろを顧みたら、北の国の例かこの日もいつのまにやら雨となつていた。糠粒ぬかつぶを針の目からこぼすような細かいのが満都の紅塵こうじんと煤煙ばいえんを溶かして濛々もうもうと天地を鎖とぎす裏うちに地獄の影のようにぬつと見上げられたのは倫敦塔であつた。

無我夢中に宿に着いて、主人に今日は塔を見物して来たと話したら、主人が鴉からすが五羽いたでしようと言う。おやこの主人もあの女の親類かなと内心おおい大に驚ろくと主人は笑いながら「あれは奉納の鴉です。昔からあすこに飼つてるので、一羽でも数が不足すると、すぐあとをこしらえます、それだからあの鴉はいつでも五羽に限こっています」と手もなく説明するので、余の空想の一半は倫敦塔を見たその日のうちに打ち壊こわされてしまった。

余はまた主人に壁の題辭の事を話すと、主人は無造作に「ええあの落書ですか、つまらない事をしたもんで、せっかく奇麗な所を台なしにしてしまいましたねえ、なに罪人の落書だなんて当になつたもんじゃありません、贗もだいぶありまさあね」と澄ましたものである。余は最後に美しい婦人に逢つた事とその婦人が我々の知らない事やとうてい読めない字句をすらすら読んだ事などを不思議そうに話し出すと、主人は大に輕蔑した口調で「そりや当り前でさあ、皆んなあすこへ行く時にや案内記を読んで出掛けるんでさあ、そのくらいの事を知つてたつて何も驚くにやあたらないでしょう、何すこぶる別嬪だつて?——倫敦にやだいぶ別嬪がいますよ、少し気をつけないと險呑ですぜ」とonda所へ火の手が揚る。これで余の空想の後半がまた打ち壊わされた。主人は二十世紀の倫敦人である。

それからは人と倫敦塔の話しをしない事にきめた。また再び見物に行かない事にきめた。この篇は事実らしく書き流してあるが、実のところ過半想像的の文字であるから、見る人はその心で読まれん事を希望する、塔の歴史に関して時々戲曲的に面白そうな事柄を撰んで綴り込んで見たが、甘く行かんで所々不自然の痕迹が見えるのはやむをえない。そのうちエリザベス（エドワード四世の妃）が幽閉中の二王子に逢いに來る場と、

二王子を殺した刺客の述懐の場は沙翁の歴史劇リチャード三世のうちにもある。沙翁はクラレンス公爵の塔中で殺さるる場を写すには正筆を用い、王子を絞殺する模様をあらわすには仄筆を使つて、刺客の語を藉り裏面からその様子を描出してゐる。かつてこの劇を読んだとき、そこを大に面白く感じた事があるから、今その趣向をそのまま用いて見た。しかし対話の内容周囲の光景等は無無論余の空想から捏出してたもので沙翁とは何らの関係もない。それから断頭吏の歌をうたつて斧を磨ぐところについて一言しておくが、この趣向は全くエーンズウオースの「倫敦塔」と云う小説から来たもので、余はこれに対して些少の創意をも要求する権利はない。エーンズウオースには斧の刃のこぼれたのをソルスベリ伯爵夫人を斬る時の出来事のように叙してある。余がこの書を読んだとき断頭場に用うる斧の刃のこぼれたのを首斬り役が磨いでゐる景色などはわずかに一二頁に足らぬところではあるが非常に面白いと感じた。のみならず磨ぎながら乱暴な歌を平氣でうたつてゐると云う事が、同じく十五六分の所作ではあるが、全篇を活動せしむるに足るほどの戯曲的出来事だと深く興味を覚えたので、今その趣向そのままを踏襲したのである。但し歌の意味も文句も、二吏の対話も、暗窖の光景もいつさい趣向以外の事は余の空想から成つたものである。ついでだから

エーンズウォースが獄門役に歌わせた歌を紹介して置く。

The axe was sharp, and heavy as lead,
As it touched the neck, off went the head!

Whir—whir—whir—whir!

Queen Anne laid her white throat upon the block,
Quietly waiting the fatal shock;

The axe it severed it right in twain,

And so quick—so true—that she felt no pain.

Whir—whir—whir—whir!

Salisbury's countess, she would not die
As a proud dame should—decorously.

Lifting my axe, I split her skull,

And the edge since then has been notched and dull.

Whir—whir—whir—whir!

Queen Catherine Howard gave me a fee, —

A chain of gold—to die easily:

And her costly present she did not rue,

For I touched her head, and away it flew!

Whir—whir—whir—whir!

この全章を訳そうと思つたがとうてい思うように行かないし、かつ余り長過ぎる恐れがあるからやめにした。

二王子幽閉の場と、ジェーン所刑の場については有名なるドラロツシの絵画がすくなくならず余の想像を助けている事を一言していささか感謝の意を表す。

舟より上る囚人のうちワイアットとあるは有名なる詩人の子にてジェーンのため兵を挙げたる人、父子同名なる故紛れ易いから記して置く。

塔中四辺の風致景物を今少し精細に写す方が読者に塔その物を紹介してその地を踏ましむる思いを自然に引き起させる上において必要な条件とは気がついてゐるが、何分かかる文を草する目的で遊覧した訳ではないし、かつ年月が経過してゐるから判然たる景色がどうしても眼の前にあらわれにくい。したがってややともすると主観的の句が重複して、ある時は読者に不愉快な感じを与へはせぬかと思つとこ

ろもあるが右の次第だから仕方がない。

(三十七年十二月二十日)

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年10月27日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：LUNACAT

2000年8月31日公開

2004年2月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

倫敦塔

夏目漱石

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>